

白虎楼と蒼龍楼

美しく傾斜したひさしに、装飾された小塔のような構造が施された白虎楼と蒼龍楼は、平安京時代の天皇御所の正庁の両脇に建っていた楼閣を復元したもので、当時の楼閣はさらに大きなものでした。これらは装飾的な意図以外に、物見櫓として防衛の役割を果たしていたのではないかと、いう説もあります。

白虎楼と蒼龍楼の名称は、古代中国の天文学で方位を象徴する4体の神獣のうちの、西の白虎、東の蒼龍に由来しています。この4体の天上の神獣は、古代中国の思想である五行思想（5つの元素）の一部を成すもので、古代中国ではこの総括的な思想によって、現象間の相互作用や関係性についての説明がなされ、宇宙の周期から医学、土占いまで、あらゆるものにこの考えが適用されていました。

五行思想は、唐王朝（618-907）の首都である長安（現在の西安）でもそうであったように、平安京の首都の位置や設計に影響を与えています。この思想や中国式土占いの影響は、応天門の内側にある手水舎にある石の彫刻から見て取ることができます。彫刻の一つが白虎、そしてもう一つが蒼龍なのです。